



発行 一般社団法人 日本品質管理学会
 東京都杉並区高円寺南1-2-1 日本科学技術連盟東高円寺ビル内
 電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507
 ホームページ:www.jsqc.org/

CONTENTS

- 1-トピックス 第103回品質管理シンポジウム報告
- 2-私の提言 品質保証教育
- 2-ルポルタージュ JSQC規格「方針管理の指針」講習会ルポ
- 3-第390回事業所見学会ルポ/第17回安全・安心WSルポ
- 4-11月の入会者紹介/教員公募/行事案内/新規研究会の受付/事務局からのお知らせ

第103回品質管理シンポジウム報告 —IoT時代における品質管理の役割と重要性—

日科技連出版社 戸羽 節文

2016年12月1日から3日にかけて、
 (一財)日本科学技術連盟主催の第
 103回品質管理シンポジウム(QCS)
 が、「IoT時代における品質管理の役
 割と重要性—IoT時代の品質保証と
 TQMの姿を探る—」というテーマの
 もとに(主担当組織委員:佐々木眞
 一氏/(一財)日本科学技術連盟 理
 事長、トヨタ自動車(株)顧問・技監)、
 箱根ホテル小涌園において開催され
 た。今回は今話題のテーマもさること
 ながら、特別企画としてQCS賛助
 会員会社であるトヨタ自動車(株) 取締
 役社長 豊田章男氏が登壇されること
 もあり、250名を超える多数の参加
 者が集う熱気に満ちあふれたシンポ
 ジウムとなった。

豊田章男氏の特別企画は「自動車の
 明るいミライへの挑戦」という演題で、
 BSジャパン日経プラス10メインキャ
 スターの小谷真生子氏との対談形式で
 行われた。全世界35万人の従業員を擁
 する大企業のトップとしての責任は重
 大である。トップの役割は、誰にも決
 められないことを決めること、そして
 責任を取ることでありと明言された。
 品質問題に関する米議会の公聴会で矢
 面に立ち、その試練の中で改めて認識
 されたとのこと。社長としていろんな
 ことに挑戦し、組織に手を加えたりも

したが、結局は「人」に行きつくとい
 う。トヨタ工業学園のビデオが放映さ
 れ、トヨタでは、自ら考え、自ら動く
 人材を育てることに力を入れているこ
 とを紹介。技よりも人間としての道徳
 観念が大事である。強く、たくましい
 人材、事が起こった時、進んで前に出
 られる人、状況判断が的確にできる人
 を育てる。小谷氏は、トヨタの人材育
 成を見ていると、「相手を慮(おもん
 ばか)る」「問(ま)をはかる」といっ
 た今の日本人には希薄となった、日本
 人が本来持っている日本人の良いところ
 を感じるという。人中心の経営、人
 材育成に向けて、自分も人としての完
 成度を上げる努力をしていきたい。イ
 ソップ童話『北風と太陽』の「太陽」
 のような存在になりたいとの熱い言葉
 で対談を締めくくられた。

人間性尊重、人重視はTQMを支え
 る大きな柱の一つである。ここにト
 ヨタの強さ、底力の源泉を見たよう
 な気がした。

法政大学 教授 西岡靖之氏の基調講
 演、4名の企業トップの方々の講演の
 のち、参加者は7班に分かれ、それぞ
 れのテーマでグループ討論が行われた。

■[基調講演] つながらない製造業
 は生き残れるか?/西岡靖之氏(法政
 大学 デザイン工学部 教授)

■[講演1] コマツにおけるIoT活動
 について/大橋徹二氏(株)小松製作
 所 代表取締役社長(兼)CEO)

■[講演2] ロボット革命により世界
 に勝つ日本のものづくり/小笠原浩
 氏(株)安川電機 代表取締役社長)

■[講演3] オムロンが提案する、新
 しいオートメーションによるモノづ
 くり革新/山田義仁氏(オムロン(株)
 代表取締役社長CEO)

■[講演4] Becoming Digital Industrial
 「次世代製造業」を目指すGEの挑戦
 /熊谷昭彦氏(GEジャパン(株) 代表
 取締役社長 兼 CEO)

次回、第104回品質管理シンポジウ
 ムは2017年6月1日(木)~3日(土)、テーマ
 は「変化に対応できる、変化を生み出
 せる組織能力の獲得」。なお、会場の「箱
 根ホテル小涌園」は、今回の第103回
 をもって最後となる。1965年6月の第1
 回から今回の第103回まで52年の長き
 に亘って会場として使用され(途中2
 回は別会場で開催)、品質管理シンポ
 ジウムといえば「箱根QCS」と呼ばれ
 るほど、親しみをもって浸透した会場
 であった。諸先輩たちが歩いたコンベン
 ションパレスにつながる、長く、急
 な階段を一步一步踏みしめながら、そ
 のお顔を思い出しながら登ったのは私
 だけではなかったのではないだろうか。

● 私の提言 ●

品質保証教育

サントリースピリッツ(株) 中島 康智



入社直後の'80年代初頭「QCサークル活動」を通じ品質管理に出会った。その後TQC導入宣言。宣言から2年後、「方針管理」「日常管理」「QCサークルの指導・育成」の3つを仕事として着実に進める事がTQCをやっている事との言明。TQC指導会で徹底的に「方針管理」の考え方を学んだ。全社で「QCの考え方」を学ぶ黎明期、ベクトル合わせの為に本メッセージは判りやすいが、小生には何故「品質保証」を取り上げないのか長い間違和感があった。

当時石川馨先生著「日本の品質管理」の一文「品質保証は、品質管理の真髄である。」に感銘し共感を持った事（今でも黄色いラインマーカーが残っている）が違和感を持った理由だ。昨今、ビジネスの至る所で「革新」が謳われ「方針管理」は非常に重要。TQC導入宣言当時から早期に成果を得る為か「方針管理」の徹底が必要であったと推察する。一方「お客様第一」も同様に至る所で日々目にする。お客様を大切に、お客様の期待に応える。本質である「品質保証」の為に「方針管理」「日常管理」が存在していると考えているので、当時の小生の違和感は正しかったと今でも勝手に思っている。

ところで最近、「方針管理」「日常管理」が着実に実施されていない事柄に遭遇する。背景に品質管理リテラシー

の低下、特に「品質保証」に対する教育が不十分ではないかと考えている。諸先輩方が苦勞し定めた「方針管理」「日常管理」のルール遵守はもちろんだが、「何故守らないといけないのか」、「何の為に守るのか」をあえて議論し、先人の苦勞を感じることで「方針管理」「日常管理」の目的である「品質保証」が体に沁み込んでいく。「品質保証」に特化し考え議論する教育プログラムが出来れば、既存のルールをベースに品質保証力が飛躍的に向上するのではないかと考えている。

品質管理が「手段の体系」である為品質管理教育についてはWeb上でも様々なサイトや手法を見かけるが「品質保証教育」となるとなかなか見当たらない。この教育は各企業独自のものではないかと最近思い始めている。製造現場の後進と共に「日常管理」をベースに「品質保証」をしっかり掴んでいく教育プログラムを立案し実行する事が今後の小生の課題と思っている。「品質保証教育」に対する先輩諸兄のご意見を頂戴できれば非常にありがたいと考えている。

JSQC規格「方針管理の指針」講習会ルポ

中條 武志 (標準委員会)

2016年12月8日(木)の午後、58人の人が参加し、本年5月に制定されたJSQC-Std 33-001「方針管理の指針」の講習会が開かれました。

最初に、2016年11月まで標準委員会委員長を務めておられた住本守氏から、「方針管理」についてJIS Q 9023:2003が既に制定されているが、それ以降、経営環境の変化に取り組む中で実践されてきた内容を盛り込んだものにし、JISの改正につなげるのが規格制定のねらいであるという話があった後、規格を教科書に、各章ごとにポイントを絞った解説が行われました。

まず、TQMにおける方針管理と日常管理の役割の違い、方針を構成する3要素「重点課題」「目標」「方策」、方針管理の主要な3つの活動「展開」「集約」「環境変化への対応」について話しがあった後、方針管理の全体の枠組みやその中におけるすりあわせの重要性についての説明がありました(4章、5章)。次に、各部門

の管理責任者(部長や課長など)が具体的に何を行うのがよいのか(6章)、組織全体に責任を持つ人(社長や事業部長など)はどのような姿を理想として方針管理を実践していくのがよいのか(7章)、推進者は教育、標準・帳票・ツールの整備、部門ごとのレベル評価などについてどのような工夫をするのがよいのか(8章)についての説明がありました。

最後に、総合質疑があり、展開や集約をスピーディに進めるのにはどうしたらよいのか、方針管理を組織に浸透・定着させるためのポイントは何かなどの質問があり、形骸化しないようにするためには目的を理解してもらうこと、実践の継続とトップ診断や管理職による指導が重要であるなどについての活発な討論が行われました。

参加者からは、「TQM推進に生かしたい」「自社の方針管理の見直しに参考になる」「少人数の中小企業についての指針があるとよい」等の声がありました。

第390回 事業所見学会 ルポ

ANA見学記

平成28年10月26日(水)にANAグループ安全教育センター（東京都大田区）にて『ANAグループの「安全」の取り組み』をテーマに開催、19名が参加した。今回は、ANAグループが、過去の事故体験者が退職等ではなくなる中、それらの記憶を風化させないようにと、安全教育施設として2007年1月に開設した「ANAグループ安全教育センター」にて開催された。

始めに「ヒューマンファクターズの基本原則」及び「安全学の基本原則」の2つの安全基本原則に基づいた「ANAグループとしての安全の取り組みと概要」について説明された。この基本概念を支える「安全マネジメントシステム」は、1) 安全のポリシー（安全は経営の基盤であること）、2) 安全リスクマネジメントと安全保証（ハザードを発生後に特定する「対象型」、事前に予測して対応する「予防型」、そしてデータに基づき将来的に予想して対応する「予測型」を組み合

わせた「安全保証」の推進)、そして3) 安全推進から成り立っていること、そして、その「予防型」を支える「ANAの安全文化(失敗を責めない非懲罰ポリシーとアサーション)」の紹介をいただいた。

その後、3つのコンセプト、1) 事故の悲惨さを体感、2) エラーの現実、そして3) 安全に維持を体得、をもとに開設された「ANAグループ安全教育センター」での従業員対象の研修を体験させていただいた。パネルによる多くの航空機事故、及び展示されている事故機体に基づくなど多くの大切な説明を受けた。見学の最後に「人は如何にエラーを引き起こすか!」を参加者全員が体験・納得し、エラーから安全を守るための仕組みの説明で締めた。参加者からの厳しい質問に対しても適切にご回答をいただいた。なお、今回の体験は、従業員に対して実施している研修を簡素化していると説明されたが、内容は濃いものであった。

最後に、業務多忙の折にもかかわらず、丁寧なご説明、そしてANAグループ安全センターの見学を設定対応いただきましたことに、心より感謝申し上げます。

寺部 哲央（元・日産自動車(株)）

第17回安全・安心のための管理技術と 社会環境ワークショップ

2016年12月23日(金)の午後、65人が参加し、「信頼を得る方法」をテーマにワークショップが開催されました。これは、日本原子力学会の社会・環境部会とヒューマン・マシン・システム研究部会、日本人間工学会の安全人間工学委員会との共催で年1回開いているものです。

前半は、異なった領域の専門家からの「信頼(Trust)」に関する講演がありました。まず、社会安全研究所の首藤由紀氏から、信頼に関する技術・人材マップの作成の経緯とその中で関係者が相互に信頼している社会の状況を目指すべき姿としたことのご紹介と、福島事故以降のご自身の経験を踏まえて、信頼は獲得すべきものではなく、様々な取り組みの結果として得られるものであるという問題提起がありました。また、同志社大学の中谷内一也氏からは、社会心理学分野における従来の研究やご自身が行った調査結果を踏まえて、組織に対する信頼は能力認知（有能さ）、動機付け認

中條 武志（安全・安心社会技術連携特別委員会）

知（誠実さ）に加えて、価値共有認知（自分と同じ価値観）が大きく影響すること、信頼が低い場合には価値共有認知の影響が大きいことの報告がありました。さらに、筑波大学の伊藤誠氏からは、自動運転に対する過信・不信を研究されている立場から、信頼とは何か、信頼が損なわれると社会のコスト負担が大きくなること、予想に反して盲信→確信→予測という順序となること、意見の不一致が放置されると不信が生じることなどの報告がありました。

後半は、東京大学の飯塚悦功氏、パブリックアウトリーチの木村浩氏が加わり、客観的な事実と信頼の関係、信頼を得る方法（自主的運命共有、魅力の訴求と限界の説明など）についてのパネル討論が行われました。分野ごとに状況が異なるため、結論を得るまでには至りませんでした。今後の実践と研究に向けて幾つかの重要な示唆の得られたワークショップでした。

2016年11月の 入会者紹介

2016年11月2日の理事会において、下記の通り正会員6名、職域会員1名の入会が承認されました。

.....
(正会員6名) ○前田 謙一 (積水化学工業) ○三浦 太郎 (マルハニチロ) ○渡辺 慎一 (ダイキン工業) ○梅影晃 (タカラベルモント) ○安田 篤 (日本飛行機) ○須賀 敏記 (テイケイ気化器)

.....
(職域会員1名) ○佐々木 亨 (JUKI電子工業)

.....
正 会 員 : 1964名
準 会 員 : 61名
職域会員 : 41名
賛助会員 : 144社189口
公共会員 : 15口

教員公募

早稲田大学 理工学術院 教員公募

募集人員 専任講師、准教授、または教授 1名
 所 属 創造理工学部経営システム工学科・創造理工学研究科経営デザイン専攻
 着任時期 2018年4月1日
 詳 細 <http://www.mgmt.waseda.ac.jp/2079>
 応募期限 2017年4月7日(金) 17時 (日本時間) (必着)

行 事 案 内

●第6回 科学技術教育フォーラム

テーマ: 社会との共創による新教育課程の実現

日 時: 2017年3月25日(土) 13:00~17:30

会 場: 電気通信大学西5号館209号室

定 員: 120名

参加費: 1,000円 (当日払い)

プログラム:

基調講演

「社会に開かれた教育課程の実現」

長尾篤志氏

(文部科学省初等中等教育局)

第1部 「海外での数理科学的問題解決教育の現状」

西村圭一氏 (東京学芸大学)

第2部 「社会との共創による問題解決力育成の実践」

森嶋真一氏

(山梨県立富士北稜高等学校)

五十嵐康伸氏

(E2D3.org/インテリジェンス)

第3部 パネルディスカッション

詳細・申込: <http://www.jsqc.org/q/news/events/index.html#h290325>

新規研究会を受け付けます

研究開発委員会では、本年度に設置する新規公募研究会の申請を受け付けます。奮って申請してください。特に、若手会員を主査とする研究会を歓迎いたします。

研究期間: 2017年4月~2018年3月 (1年間)

申請方法: 「新規研究会設置申請書」(様式204-1)をホームページよりダウンロードし、ご記入の上、郵送で本部事務局宛にお送りください。
http://www.jsqc.org/ja/oshirase/kenkyuukai_shinki.html

申込締切: 2017年3月24日(金)必着

研究会の申請と運営:

- 研究会の申請にあたり、申請者は共同研究者(学界・産業界)を5~10人位事前に働きかけて集め、申請書に記入する。理事会承認後JSQCニュースでメンバーを公募する。
- 研究目的と年間の研究活動計画を作成する。
- 1研究会のメンバーは20人までとする。
- 会場は原則として日本科学技術連盟東高円寺ビル会議室を利用する。
- 時間は18時~20時とし、食事を支給する。ただし、会場の都合がつけば午後でも可とする。
- 研究会運営費は一人1回当たり1,150円(内訳:通信費・資料代・食事代)。ただし、年間開催数は11回を限度とする。

事務局からのお知らせ

日本品質管理学会監修「JSQC選書27」好評発売中

●JSQC選書27 (184ページ)

書名: サービス品質の保証 - 業務の見える化とビジュアルマニュアル -

著者: 金子憲治

判 型 等: 四六判、並製本

定 価: 1,700円(税別) → 学会員特典価格: 1,360円(税別)

申込方法: http://www.jsqc.org/ja/kanren/jsqc_sensyo.html

※書籍は請求書を同封して日本規格協会から発送いたします。

●H28年度 QMS-H研究会 成果報告シンポジウム

テーマ: 組織で保証する医療の質 QMSアプローチ

日 時: 2017年3月5日(日) 9:30~17:00

会 場: 早稲田大学西早稲田キャンパス
63号館2階03、04、05会議室

参加費: 無料

申込締切: 2月17日(金)

詳 細: <http://www.jsqc.org/ja/division/med/iryuu.html>

●第113回研究発表会(本部) 発表募集

日 時: 2017年5月27日(土) 28日(日)

会 場: 日本科学技術連盟東高円寺ビル

(1)申込期限

発表申込締切: 3月22日(水)

予稿原稿締切: 4月24日(月)必着

参加申込締切: 5月17日(水)

(2)研究発表・事例発表の申込方法

1月送付の発表申込要領をご覧ください。

(3)参加申込

本部事務局宛E-mailまたはFAXにてお申し込みください。

行 事 申 込 先

JSQCホームページ: www.jsqc.org/

本 部: TEL 03-5378-1506

FAX 03-5378-1507

E-mail: apply@jsqc.org